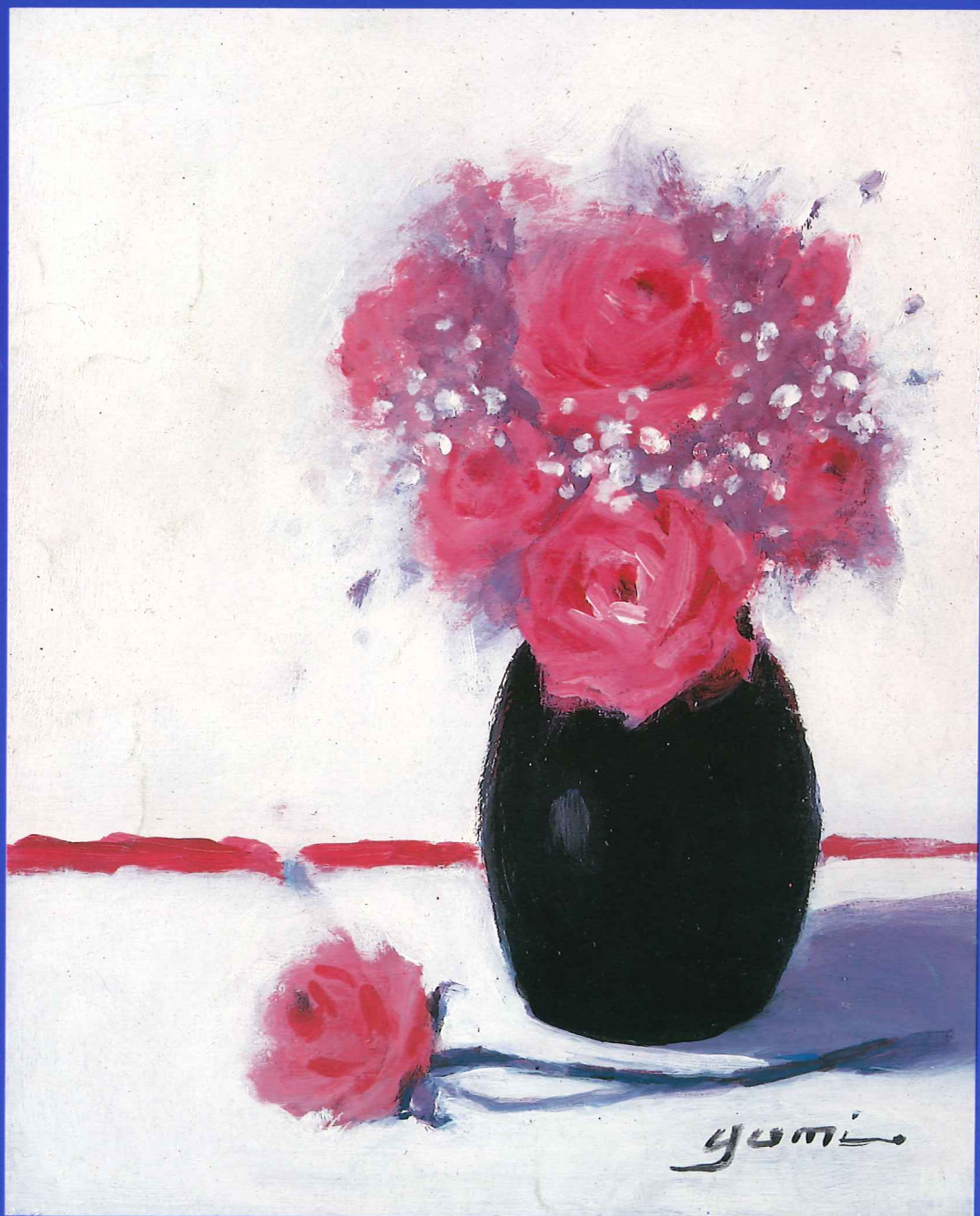


# 成溪會誌

1994.1 No.78



# 成蹊会会長に 就任して

谷岡喜久蔵



このたび、図らずも成蹊会会長に就任いたしました。至らない者ですがどうぞよろしくお願い申し上げます。最初から私事で恐縮ですが、私は母校成蹊学園に子、孫共々六人がお世話になり、只今在学中の者を含めて三代に亘り延べ六十六年間校門をくぐった計算になります。これは私に限ったことではなく、私以上の多額納税者が多数いることを知っております。「同一家族

の教育は同一学校から受ける」ことが当時の教育方針だったかも知れませんが、

キャンパスの今昔を申しあげますと、私の在学中（昭和十年前後・一九三五）生徒数（小・中・高）は九百名足らずでしたが現在（小・中・高・大）は一万名近く、しかも校地面積は同じですから、人口の過密、建物の林立は止むを得ない現実です。現に十二階建てが建築中であり、トラスコン（雨天体操場）が食堂に様変わりするなど目まぐるしく変転しております。

さて、学園と成蹊会の歴史を顧りみますと、創立（明治四十五年・一九一〇）八十余年の学園を仮りに私なりに三期に分けますと、第一期は池袋時代（十三年間）創立者中村春二先生がご存命で、直接教育に当たられた草創期。第二期は吉祥寺前期（二十五年間）旧制七年制高等学校時代。第三期は吉祥寺後期（現在まで四十四年間）で戦後の学制改革による大学の創設以降です。すでに大学政経学部第一回生は還暦を超えております。

その卒業生団体である成蹊会の前身は、各々学校別に同窓会が結成されておりましたが、創立者の十三回忌（昭和十一年・一九三六）に当り各学校同窓会並びに教職員生徒一同が據金して

胸像（校庭に現存）を建立したのを機会に、成蹊会の名の下に団結し今日に至っております。

太平洋戦争前後は日本全体が非常体制で同窓会活動どころではなく、戦後しばらくして成蹊会を再興しようという先輩の徳慮もあって、先ず名簿づくりから始めました。金もなく紙もない当時のことでしたが、先輩の会社からサッカー（甘味料）や石けん（鉱物油）を分けて貰いこれを資金にして仙花紙（粗末な洋紙）を買って謄写印刷をしたものです。

昭和三十年（一九五五）文部省にお百度参りして任意団体から社団法人に組織を変更しました。その定款第四条に「この法人は、学園建学の精神の発揚を促進し、学園の後援及び育英を行うとともに、会員の親睦を図り、もつて教育の進展に寄与することを目的とする。」と明示されております。所謂「建学の精神」とか「成蹊精神」とは不立文字で表現しにくいものであります。これを体得したものは、成蹊に学んだ者がその時代時代に教えを受け、脈々と流れ受け継がれた卒業生でありましょう。

翻つて、学園の創設にかかわった関係者は、卒業生の将来像について如何

に期待しているかを示唆する一文、即ち成蹊学園六十年史（昭和四十八年・一九七三）に記述されております。岩崎小弥太氏が晩年今村繁三氏（共に学園創立賛助員）に語った言葉で、「成蹊学園は将来卒業生の手に渡すべきものである。英国の私立学校は殆んどすべてがその卒業生によって運営されている。（中略）卒業生はもつと成蹊学園に誇りをもってもらいたいものである。母校に誇りを感じてこそ初めて愛校心が湧くのである。」（後略）

恐らく我等卒業生に願望を込めて奮起を促したものと思われます。卒業生が学園にとつて重要な財産であり、貴重な存在であることは間違いない、その社会的貢献度が母校に影響することもあるかもしれません。いつの世でも母校と卒業生は車の両輪であつて欲しい、その意味で成蹊会の役割は重大です。

今回、長い間常務理事として成蹊会に関与してきました私が、会長に選任されましたが、ポストは変つても中身は同じもので、急に発想を転換することか、新機軸を打ち出すなど容易なことではありません。何卒各位からご叱正をいただき、奮馬を鞭打つて大任を果したいと念願しております。

（旧高・13年）





TOKYO

# 逆境に耐え人に頼らぬ 精神を育ててくれた 成蹊高等女学校

淡島千景 (女優)

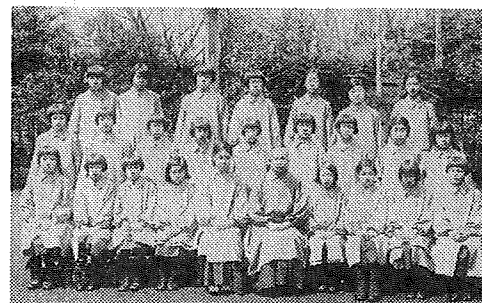


振り返って考えてみると、私にはタカラヅカより成蹊の方が合っていたと思うんです。

今は武蔵野市吉祥寺にありまして、成蹊は当時目白にありました。入学したのは昭和十二年です。「女子を良くしなければ良い社会はできない」という考えのもとに創られた学校で、父がごなにかに聞いて、「大変すばらしい学校だから娘達を入学させた」ということになったわけなんです。それで、父はまず母を一年間通わせました。成蹊に。と言っても毎日ではなかったと思っ

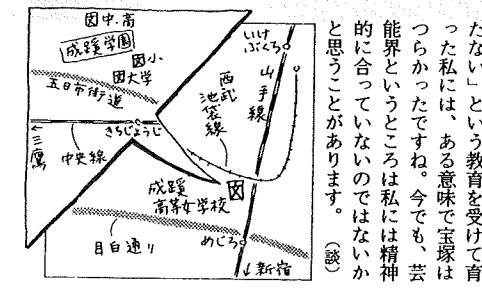
## tea time

父は「学校と家庭が同じ方針でなければ教育は徹底しない」という考えでしたし、姉は普通の小学校に通っていましたが、当然ながら、成蹊小学校から上がってこられた生徒さんといないわけですね。ですから、子供より先にまず母親を通じて、校風や教育方針を理解させようと思っただけです。そして二人の姉が入学して、



「もう一人小さいのがおりますのでよろしく」(笑)というところで私が入学したんです。成蹊のカリキュラムはかなり特異だったかもしれませんね。始業は朝七時半。まずお掃除からです。真冬でも裸足で全校舎を雑巾がけするんです。茶道が正課でしたから、「不言庵」というお茶室があって、その石畳は雨でも雪の日でも丁寧にタワシで磨きます。お掃除が終わると、「自強術」という体操をして、「疑念」を行ないます。座禅のようなものですね。それから観音経と「心力歌」を唱えて一日の心構えを作ります。九時からの授業は英語も含めて今の学科ほとんど同じですが、袴と振袖をつけて行なう作法の授業や茶道、華道があったのが特色でしょうね。それから体育の時間には、弓道、長刀、小太刀を習いました。昼食は今で言う給食。でも、二年生が全部作るんです。お炊事場でお割烹の先生に指導して頂きながら。そして校長先生以下先生方と全校生徒がお食堂に集まって頂くんですが、頂く前には「五観儀」というお食事に感謝する五箇条を唱えます。食べる速度は他の方に合わせて、そして決して残してはいけないんです。「人が誠意をもって作った物を残してはいけません」という考え方ですから、食べられないと思ったら、手をつける前になたかに差し上げたり、お食事中はおしやせしたり、キョロキョロしてはダメ(笑)。冬には「断食会」がありました(後列右端)

た。「人間はどこまで耐えられるか」を試すためです。それから「徹夜会」。若いからみんな眠くなるんですよ。すると講談師が現われて目をさますために「怪談」を語るんです。私は怖がりだから、もう怖くて怖くて……でも姉達から騒いだり大声を出してはいけないと言われていましたから、「これは怖くないんだ」とって一所懸命自分に言い聞かせるわけ(笑)。



芸能界は私に合っていない。つまり、こういう実科を通して、人として女性としての心構えや生き方を教えているんです。ええ？ 修行僧みたい？ 私一度も窮屈だもつらいよ。でも「新聞の三面記事は読んではいけない」「先生に推められた本以外は読まないように」と言われても素直にその通りにしてました。だって、家庭も全く同じ方針ですからね。私はこういう成蹊が好きでしたし、逆境に強くなったのはこの学校のおかげだと感謝していま

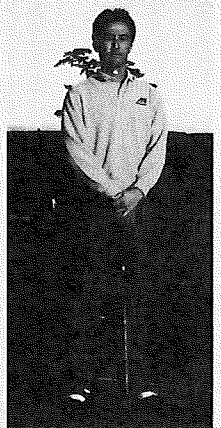
す。ですから、三年生の終わりに病氣と偽って学校を休んで宝塚を受験したことは今でも本当に申し訳ないと思っています。あと一年でしたけれど、そのまま成蹊へは戻りませんでした。だって卒業したら名簿に載るでしょ。女優が卒業生なんて成蹊の不名誉だと思いましたが、入学式の時、奥田正造校長先生がおっしゃった言葉を今でも覚えています。「皆さんは尊いお母様になるために入学しました。人間は平凡に暮らせることが一番幸せです。残念ながら一つ目の事は実行できませんでしたが、二つ目は守れたと思います。「平凡」とは「心安らかに」ということですから。「感情を露わにすることはしたくない」という教育を受けて育った私には、ある意味で宝塚はつらかったですね。今でも、芸能界というところは私には精神的に合っていないのではないかと思います(談)

### この人にきく

## 佐藤英之 氏 (ラフォーレアー/経・昭和五七年卒)

### のめり込む性格が「プロ」への

ゴルフを本格的に始めたのは、成蹊大学に入学してゴルフ部に入ってからです。それ以前は、父に連れられて練習場でホールを打った程度でした。



静岡カントリークラブ浜岡コースクラブハウスにて

一社内定を受けました。「何か物足りない」とものを感じながらその会社の研修に参加したんですが、そこで「やることはこれじゃない」と分かりました。この時は自分でも不思議なくらい、すぐに行動に出てしまいました。た。その翌日、本社に行き内定をうまく取りたいという精神的な

取り消していただいたんです。しかし、この時は大学に連絡をせずに勝手に行動をしてご迷惑をかけてしまいました。ゴルフはミスのゲーム  
ゴルフのおもしろさは、「なかなかうまくいかない」ところにあるのじゃないですか。ゴルフは本来ミスのゲームなんです。誰でもが犯すミスを少なくしたい。一生かけてもできないかも

エネルギーを枯渇させないことが重要だと思えます。それにはいつも目標を持っていることじゃないですか。ひとつの目標がクリアできた次の目標へ向かって努力する。その目標は技術的なこともあるし、精神的なこともある。プロの生活の糧である、賞金となることもあるでしょう。こうして一歩ずつ最終目標へ近づくのです。これは私の人生哲学でもあります。

### 貴重な経験 シードの壁

十年前にプロになり第一の目標が達成されました。次の目標はシード権獲得でした。しかし、トーナメントで賞金をもらうには毎回予選を通過しなければなりません。これが意外な壁で、あと一打足りなくて予選落ちというケースが随分ありました。原因は技術的なものよりメンタルな要素が大きかったようなんです。それを何とか乗り越え、一昨年初めてシード権を獲得しました。

昨年獲得したシード権を維持することが当面の課題でした。しかし、先輩のプロからも言われていたのですが、シード一年目は予想以上に大変なものでした。随分頑張ったつもりでしたが、シーズン後半になっても賞金ランキングはシード権獲得ラインに届かず、焦りも出てきました。最後はもうがむしやうでした。もがきにもがきました。そして最終戦でぎりぎり最下位で浮かび上がったのです。本当に貴重な経験でした。こんな経験やろうとしてみてもできない、もう絶対にはたかないですから、さしなる目標に向かって

### プロフィール

1960年生まれ。経済学部経営学科卒業。1983年プロ・テスト合格、1992年にシード選手となる。正確な技術を持ち、将来を期待されている。今春は3月28日現在、すべて予選通過、ランキング21位。

中止になりましたが、最終日までトップに立ち優勝を争うまでになりました。もちろん初優勝です。しかし、その時は優勝したいというよりも、まだ早い、まだ勉強の段階だという思いが強かったんです。だから自分で「今トップだ、トップだ」と心理的にプレッシャーをかけました。そんな中で自分がどんなゴルフをするか見てみたかったんです。結果は四位に終わったのですが非常にいい経験になりました。このような経験をいくつか積んで初めて「勝ちたい」という気持ちが出てくるんじゃないですか。

以前はプロになってシード権を持っている人は素晴らしいゴルファーに見えたり、自分もそうなることが夢だったんです。しかし、いざなってみると大したことではない、これだけでは満足できない。成蹊時代に打ち込んだ千発を基にして、まだまだ上を目指すと、いう心境です。(聞き手 鈴木)

(成蹊大学広報誌 ZELKOVA No. 7 より転載)

(週刊文春・平成5年7月1日号より転載)

中川慶子 (女・15年)